括之狀、故名須波流也、今俗或呼六連星、○略中文殊師利菩薩及諸仙所說吉凶時日善惡宿曜經二卷、劉宋不空譯所引序月宿所主品文、原書六星下、有形如剃刀四字、此節文、說文、昴、白虎宿星、毛詩小星傳、昴留也、正義引元命苞云、昴六星、昴之爲言留、言物成就繫留、按、元命苞云、昴六星、與宿曜經所說同、晉書隋書天文志、開元占經西方七宿占引石氏、並云、昴七星、史記天官書正義、天文大象賦注、亦以爲七星、其說不同、蓋古觀窺未精、故爲六星、至清儀象考成、乃云、昴宿七星外、增五星、都十二星、蓋明以後有望遠鏡、所以後人所見益精也、

〔段注說文解字七上日〕昴白虎宿星、从卯、从日、卯聲、莫飽切、古音在三部、毛以漢人語釋古語也、元命苞云、昴六星、昴之言留、留物成就繫留之義也、从日卯聲、卯古音讀如茅、古文酉字、字別而音同、在三部、雖同在三部而不同紐、是以卯聲之劉、留聊柳、聊卿、卿非爺爲一紐、卯聲之昴爲一紐、古今音讀皆有分別、卯聲之不讀莫飽切、猶卯聲之不讀力九切也、惠氏棟因毛傳之語、謂昴必當从卯、其說似是而非、王氏鳴盛尚書後案襲之非也、莫飽切、古音在三部、

〔類聚名義抄二〕昴音卯スハル

〔日本釋名上天象〕昴スマル　星の名也、すはつらぬく也、つとすと通ず、まるはまるき也、此星の形いとを以、玉をつらぬけるがごとく、つらなりてまるし、日本紀神代卷に、いをつのみすまるといへるも、五百顆のつらぬける玉のつらなりてまるきを云、

〔物類稱呼一天地〕昴ぼうすばる星と云、二十八宿の内也、東國にて九ようの星と云、江戸にては、むつら星といふ、

〔物類稱呼一天地〕參宿からすきぼしと云、二十八宿の内也、中星の横につらなりたる三の星を、江戸にて三光といひ、又三ッ星といふ、關西にて親になひ星と云、東國にて三ちやうの星と呼、武藏の國葛西にてさんかぼしといふ、

〔撮壤集上天像〕九曜　羅睺ラゴ星　土曜星　水曜星　計都ケイトウ星　金曜星　日曜星　月曜星　火曜星　木曜星

〔塵袋一〕一九星トハ九曜歟、

九曜星

參星